

まほうのおこめ

川越市立川越小学校 一年
石川 希羽

ぼくはねんしようのとき、からだがとてもちいさく、ごはんもすこしかたべられませんでした。とおこめはあじもなくなりがてでした。そんなぼくでしたが、いまではごはんをたくさんおかわりして、とてもおおきくなりました。それは、こんなことがあったからです。

ねんちゆうになったおしよがつのことです。おばあちゃんのおともだちのみかわさんがあそびにきていました。

「きはねくんは、おこめきらいなの？」

ぼくが、おこめをのこしているのをみて、みかわさんがいいました。ぼくは、

「あじがないからきらい」

といました。みかわさんは、にっこりわらいながらおしえてくれました。

「それは、きはねがよくかんでたべないからだよ。おこめは、よくかむととてもあまくなるし、からだをとてもおおきくしてくれるから、にがてはもったいないよ。」

みかわさんはそういって、ぼくのおこめをおいしそうにたべました。ぼくも、まねをしてよくかんでたべてみました。

「ほんとうだ。とてもあまくておいしい。」

ついこえがでてしまうくらいあまく、いままであじがないなんていつていたのが、はずかしかったです。

「なんでもよくかんで、おいしくおおきくなってね。」

みかわさんはいいました。ぼくは、おこめをたべるのがとてもたのしくなりました。かめばかむほどおいしくなるなんて、まほうみたいでした。

それからぼくは、ごはんをよくかんでおいしくたべられるようになり、もりもりおおきくなりました。まいにち、おこめをよくかんで、かめばかむほどあまくなるまほうをぼくはつかっています。